

## 外地で活躍した図書館人・林靖一：略伝と著作一覧

小林昌樹

### はじめに

林靖一は日本統治時代の朝鮮において、京城（現ソウル）郊外の龍山地区に設けられた「鉄道図書館」を創始し、初代館長を務めた人物である。また、戦後は東京都立日比谷図書館の再建（現在の建物）にも関わっている。

林には経営実務上の業績だけでなく、図書館学上の業績も大きいものがある。関連研究の乏しかった戦前の日本でオリジナルな著作を3冊も上梓した。彼の活動の原点は外地にあったが、これらの著作を通じて内地の図書館人にもその存在をよく知られ、影響を与えた人物であったといえる。

林の知見は図書館運営上のほぼすべての領域に及び、同時代への影響の広さと、実践における成功は特筆されるべきものがあるにもかかわらず、しかし、死後彼の業績は早くに忘れられ、図書館史における研究もない。

その理由として、林の創設した鉄道図書館が外地にあったこと、私立図書館であったが官立（国立）図書館になったこと、公共図書館でも専門図書館でもあったこと、有名な満鉄図書館のひとつとして出発しながらも独自のものになったことなど、戦後図書館界の認識枠組みに納まらないことが考えられるが、それ以前の問題として資料の散逸がある。林は引揚げ時に資料を持ち帰ることができず、鉄道図書館も朝鮮戦争で災禍を受け資料が残存していないとされるうえ、館報や館史が公刊されていなかったことが、林についての研究を妨げている。そこで本稿においては、まず林の人物像を知るため彼の略伝をまとめ、業績の全体像を知る手がかりとして、林靖一の著作を中心に文献一覧を作成した。



【写真1】鉄道図書館玄関前の職員集合写真。林靖一は3列目中央、ネクタイ姿。前列（向かって）左端に古野健雄がおり（1926年4月入館）、女性は満鉄児童図書館の職員と思われるので、昭和初年頃の撮影か。古野健雄による詩（文献b-4）に「幾たびか記念撮影で並んだことのあるこの玄関」とある。



【写真2】日比谷図書館仮庁舎前の林靖一と土岐善麿ら。1951（昭和26）～1954（昭和29）年のいずれかの年。

## I. 略伝

林靖一は1894（明治27）年12月26日、滋賀県大津市膳所に生まれた。父は同所在住の林清兵衛。母は屋寿（やす）。屋寿の妹の娘に小倉遊亀（日本画家）がいる。

県立膳所中学在学中の1912（明治45）年ごろ、思うところあって中退し出奔、朝鮮へ渡る。1913（大正2）年、朝鮮総督府鉄道局に雇員として入局するが、当初より久保要蔵局長付きの側近として文書課図書室に配属され、秘書的な業務をしていた。この配属は中学時代の野球歴を買われたものらしく、このころの林は野球選手として活躍し、たとえば1915（大正4）年春と秋の朝鮮野球大会では鉄道軍投手を務めている。

### 図書館の開設と館長就任

1917（大正6）年、朝鮮国有鉄道を南満洲鉄道株式会社（満鉄）が7年間の期限で委任経営することとなり、その初年度の純益が記念事業に投ぜられることとなった。この利益で鉄道学校とあわせ図書館が新設されることになる<sup>1)</sup>。1918（大正7）年には満鉄京城図書館が京城鉄道学校附属として仮開館しているが、この当初の図書館は既存の各種図書室を制度化したものであったらしく、本格的図書館の計画、創設は久保要蔵によって林に一任されるところとなった。

林は1919（大正8）年、内地へ渡り、和田万吉（東京帝国大学）による図書館講座を受講、今沢慈海（東京市日比谷図書館）にも教えを乞いつつ山口図書館など各地の図書館を見学し、新図書館のプランを練った。翌1920（大正9）年7月には半独立建築が竣工、同月21日開館した（この年が創立年とされている）。林が経営したこの図書館は「満鉄京城図書館」として発足したが、その後、2度ほど改名されているため、ここでは戦前の通用名である「鉄道図書館」を代表的呼称としたい。最初でこそ鉄道学校附属であったが、事実上、当初から林靖一を館長とする独立した経営権の下にこの図書館は経営されており、早くも1922（大正11）年5月には林は正式の館長（主事）に就任している。この時、林は満27歳であった。

### 多彩な活動

1925（大正14）年に朝鮮鉄道は総督府鉄道局の直営に戻り、それに伴って

図書館も鉄道図書館と改称したが、ほかの満鉄図書館と同様に、鉄道に関する専門図書館というよりも公共図書館的な性格が強かった。所在地の京城郊外・龍山は当時、鉄道官舎や陸軍官舎の広がる日本人街だったため一般人向きのサービスが行なわれ<sup>2)</sup>、大正末から昭和前期にかけての鉄道図書館の活動と、それを踏まえた著書の刊行が林靖一の図書館人としての主な業績を形成することになる。

1922（大正11）年には分館「満鉄児童図書館」を開館し<sup>3)</sup>、1923（大正12）年には安全開架<sup>4)</sup>を実施する。これは戦前における開架のほぼ唯一の成功例といってよい。1925（大正14）年には初の著作『図書の整理と利用法』を刊行した。朝鮮図書館研究会の特別会員として、日本図書館協会の評議員として、業界団体でも活躍している。朝鮮教育会での講演や、図書館週間におけるラジオ放送への出演といった一般社会への図書館PRにも余念がなかった。

## 栄転と表彰

林の活動は広く認められるようになり、鉄道局内の名物男として「図書館（ずしょのかみ）」との異名をとるまでになる。そして1937（昭和12）年8月に至り、新設された本局調査課の第一係長に栄転する（同年11月、副参事に昇進）。純粹な鉄道マンとしての林の業績は、同課防空係長時代の防空施設の新設（1940年ごろ）、運転系統の刷新などが挙げられており、中でも機関車用「甲種車検庫」の数億円に上る予算獲得は自身の誇りとするところであった。

この時に林は図書館現場を離れた形にはなったが、同時に図書館主事の兼務発令を受けており、1942（昭和17）年11月に後任の古野健雄が発令されるまで、電話による指示だけで館務を滞りなく執っていた。実際、「鉄道図書館の創設並に経営」を授賞理由として1943（昭和18）年3月に日本図書館協会から総裁賞（昭和17年期乙第5号）を受賞した際には、「昭和十七年マデ経営ノ任ニ在ルコト二十有余年」の業績を評価されている。同じ昭和18年の12月、鉄道図書館は所属部局の改組（鉄道局→交通局）に伴い「交通図書館」と改称。設立当初は7千余冊だった蔵書は、昭和19年3月末の段階で17万冊を超えていた<sup>5)</sup>。総裁賞は1941（昭和16）年5月にも日本図書館協会五十周年記念として林の著作に対して贈られており、総裁賞を2度受賞したのは林だけである。

兼務を解かれてから後、林は運転課、総務課を歴任し1945（昭和20）年を

迎える。終戦後は家族を先に内地へ帰し、局員の引揚げや残務処理に従事した後で自身も1946年3月ごろ内地へ戻るが、その際に『図書保管法：点検・払出篇』の原稿を紛失してしまったのは惜しいことであった。なおこの時の話として、都市対抗野球の優勝旗「黒獅子旗」の内地帰還にも関与したという（敗戦前、最後の優勝は「全京城」だったため）。

## 戦後

1946（昭和21）年、林は日比谷図書館（焼失のため京橋図書館が仮事務所）に勤務する。当時、東京都中央図書館長であった中田邦造の引きによるものであった。中田は外地から引揚げてきた有能な司書を図書館界に引き留める活動をしており、借り上げていた「銀魚荘」（杉並区西高井戸）を戦災司書たちの宿舎として開放していた。林一家も翌年の銀魚荘解体までここへ入った（後、練馬区豊玉北へ転居）。

ところがこの時期、日比谷図書館では中田邦造館長と職員組合の対立が先鋭化する。これは、1949（昭和24）年9月30日の中田館長辞任で一応の決着を見るが、中田の引きで同館に勤務することになった林は、ために数年間不遇をかこつこととなった。同館では特別図書整理主査に任ぜられながらも活動の場はむしろ図書館界に求められ、1949（昭和24）年ごろには丸善と図書館用品を開発、翌年には戦前の著書を復刊、図書館職員養成所講師、日本図書館協会参与、東京都学校図書館協議会顧問、日本交通協会図書館館長なども兼務している。

日比谷図書館における状況が変わるのは1951（昭和26）年3月の土岐善磨館長の就任によってである。土岐の信任を得、林は同年4月には奉仕課長に任ぜられる。しかし同年初夏から健康が思わしくなくなり、療養を余儀なくされた。

病が癒えると今度は整理課長に任ぜられるが、林は最後の数年を土岐館長、高橋武士技師らとともに日比谷図書館の再建プラン策定に費やすことになった。平面が三角形の独特なプランが成案を得たのは1954（昭和29）年3月のことである。

けれども、林は翌1955（昭和30）年初めに心膜炎を発病してしまう。2月17日午前10時、死去（享年60歳）。日比谷図書館起工式（3月）は目前であった。戒名は自身の遺言により「鉄図院甲検朴公靖一居士」とされた。弔辞は当時の日本図書館協会会長金森徳次郎からも寄せられた。

没後、遺族による2回分の醸金を基に日本図書館協会に林靖一賞が設けら

れ、1956（昭和31）年には古野健雄に、その翌年には伊東伊太郎らに授賞がなされている。

林靖一について、御子息・林貞夫氏には談話・メモなどを参考にさせていただき、さらに家蔵のアルバムから貴重な写真を転載させていただくことができた。厚くお礼を申し上げます。また、文章の性格上、林靖一ほかの方々について敬称を略させていただきました。

## II. 文献目録

以下にa.林靖一について、b.鉄道図書館についての文献を挙げ、c. 鉄道図書館による刊行物リストを掲げた後、さらにd.林靖一による著作の一覧を掲げる。

- (1) 排列は原則として刊行年月順。単行書も含めて排列し、便宜的に番号を付けた。この番号を使い注においては「文献a-1」などと表記した。
- (2) 雑誌記事については、タイトル、収録誌名、巻号、収録ページ、刊行年月で記述した。国立国会図書館所蔵のものは書誌の末尾【】内に国立国会図書館の請求記号を記載した。※は編者が付した注である。〔〕内は補記。
- (3) 原資料を確認できなかったものは、総合目録や末尾の書誌・総目次から採録した。

### a. 林靖一についての文献

- 1 「五十週年記念式」『図書館雑誌』35（6）p.457-467（1941.6）  
【YA5-1366】
- 2 衛藤利夫「総裁賞の人々（乙五）林靖一氏」『図書館雑誌』37（6）p.386-387（1943.6）【YA5-1366】
- 3 鳥生芳夫「書架について：林靖一氏の考案による“ななめ書架”について」『読書相談』3（10）（1951.11）【YA-605】
- 4 古野健雄「林靖一氏の死を悼む」『図書館雑誌』49（3）p.77（1955.3）  
【YA5-1366】
- 5 間宮不二雄「林靖一君を憶う」『図書館界』7（1）p.30-31（1955.4）  
【YA5-107】
- 6 武田虎之助「〔林靖一賞選考委員会報告〕（昭和31年度社団法人日本図書

- 館協会総会議事録)』『図書館雑誌』50(8) p.319 (1956.8) 【YA5-1366】
- 7 武田虎之助「中井賞、林賞授賞式」『図書館雑誌』51(7) p.270 (1957.7) 【YA5-1366】
  - 8 佐藤貢「図書館学者としての林靖一：その著述物から見た」『中部図書館学会誌』6(1) p.11-42 (1964) 【Z21-140】 ※本文のほとんどが林著作の目次である。
  - 9 金子彰吾「林靖一論」『佼成図書館月報』(6) p.2-3 (1965.8) 【Z21-147】
  - 10 金子彰吾「林靖一論」『佼成図書館月報』(7) p.6-9 (1965.9・10) 【Z21-147】
  - 11 林貞夫「林・古野名コンビの思い出(故古野健雄氏追悼)」『図書館雑誌』67(5) p.200-201 (1973.5) 【YA5-1366】
  - 12 増田憲二「古野健雄氏を懐う」『鮮交(鮮交会報)』(86) p.13-14 (1973.11)
  - 13 喜田幸治「林靖一さんの思い出」『鮮交(鮮交会報)』(178) p.17-19 (1991.4)
  - 14 「株式会社伊藤伊〔広告〕」『図書館雑誌』93(6) ページ付なし (1999.6) 【Z21-130】 ※林靖一による協力について伊藤伊太郎が言及している。
  - 15 小林昌樹「今によみがえる林靖一(1894-1955)」『文献継承』(11) p.1-5 (2008.2)

## b. 鉄道図書館についての文献

下記の他に、同時代のものとして『朝鮮之図書館』や『文献報国』【Z21-B73】の彙報欄に林靖一や鉄道図書館の活動を拾うことができる。

例 「荻山・林両氏満洲出張(朝鮮図書館界)」『朝鮮之図書館』5(5) p.44 (1936.10) 【Z21-457】

- 1 「鉄道図書館及び博物館」『朝鮮鉄道四十年略史』朝鮮総督府鉄道局 1940.11 p.192-193 【DK55-3】
- 2 『図書館管理法関係資料』〔出版者不明〕1944.3 153p. 謄写版【013-To571】 ※「接架式閲覧法(開架式)」(p.71-75)に鉄道図書館の平面図がある。
- 3 古野健雄「終戦前後の朝鮮鉄道図書館」『図書館雑誌』59(8) p.323-325 (1965.8) 【YA5-1366】

- 4 古野健雄「赤煉瓦の図書館」『鮮交（鮮交会報）』（60）p.1（1969.7）  
※古野健雄による散文詩。
- 5 古野健雄「龍山の図書館を訪ねて」『鮮交（鮮交会報）』（60）p.2-3（1969.7）
- 6 関野真吉「朝鮮の図書館を語る」『図書目録法研究』 関野真吉先生喜寿記念会 1973 p.234-236【UL631-8】 ※『図書館雑誌』59（8）（1965.8）の再録。
- 7 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究：開化期から1920年代まで」『参考書誌研究』（30）p.1-22（1985.9）【Z21-291】
- 8 「交通図書・博物館」『朝鮮交通史』 鮮交会 1986.9 p.208-210【DK55-104】
- 9 藤田豊「朝鮮の図書館」『近代日本図書館の歩み 地方篇』日本図書館協会 1992.3 p.848-853【UL55-E18】
- 10 宮本正明「解題」『李王家蔵書閣古図書目録；朝鮮総督府及所属官署主要刊行図書目録；解説・解題』加藤聖文、宮本正明編集・解説・解題 ゆまに書房 2004.3 p.417-423（書誌書目シリーズ；62. 旧植民地図書館蔵書目録；第14巻）【UP115-H21】

### c. 鉄道図書館による刊行物

新着リスト、案内リーフレット、蔵書目録といった、図書館活動の基本となる刊行物が出版されているが、さらに専門書誌だけでなく雑誌記事索引（c-10）を出版したのは戦前では異例であろう。

- 1 『図書館蔵書追加目録』 満鉄京城図書館 月刊 1922?- ※未見。『同』2（10）（1923）の現存が確認できる。ほぼ月刊のペースで継続刊行されたらしい。1926年頃、『新着書追加目録』と改題され、17（5）（1943.3）あたりまで刊行されたようである。12（1）（1937.4）から、「一般関係図書」「事務関係図書」「技術関係図書」が順番に刊行されていた。
- 2 『満鉄京城図書館案内』 満鉄京城図書館 1923 1枚刷折本【YD5-H-R016.4-Mi37ウ】 ※表紙に周辺地図がある。
- 3 『満鉄京城図書館図書目録 大正14年』 満鉄京城図書館 1925. 1 506p.【YD5-H-540-18】
- 4 『鉄道図書館案内 1928年』 鉄道図書館 1928 1枚刷折本【278-126】  
※現物は調査中



- 5 『鉄道図書館案内 昭和3年度』 鉄道図書館 1929 1枚刷折本
- 6 『〔鉄道図書館〕 蔵書目録 第1巻』 鉄道図書館 1929.3 777p.  
【YD5-H-567-25】 ※林靖一による次のコラム記事がある。「図書の定価」(p.69)、「円本はコンな理クツで安く出来る」(p.147)、「出版界に対する不満」(p.340)。近年、復刻された(ゆまに書房, 2004.3【UP115-H10】)。
- 7 『Railway motor cars; a list of references, Sept. 1925』 Library, Bureau of Railway Economics 鉄道図書館〔1930〕 68p.【100-567】 ※鉄道図書館による翻刻。鉄道図書館の請求記号入り。林靖一による序が付いている。
- 8 『Ventilation of railroad tunnels : a list of references, Apr. 1925』 Library, Bureau of Railway Economics 鉄道図書館〔1930〕 18p.【100-567】 ※同上。
- 9 『鉄道図書館蔵書目録』 鉄道図書館 1937.3 12, 1164p. 別冊『件名索引』(30p.) 付き【YD5-H-658-217】 ※別冊『件名索引』は現在でいう分類名辞の索引。
- 10 『鉄道関係雑誌記事目録 昭和10-12年』 鉄道図書館 1938.12 212p.【YD5-H-R686-C54ウ】 ※鉄道に限らず関連ジャンル(建築や事務など)も含む広汎な雑誌記事索引。『朝鮮総督府鉄道局局報』に連載した同タイトルの記事の累積版。
- 11 『鉄道関係雑誌記事目録 昭和13-14年』 鉄道図書館 1940.11 279p.【YD5-H-R686-C54ウ】 ※例言に「今後出来得れば一箇年分毎に纏め刊行の予定である」とあるが、続巻は未確認。
- 12 『鉄道図書館蔵書目録 技術関係之部(昭和15年3月末現在)』 鉄道図書館 1941.12 18, 618, 12p.【YD5-H-R503.1-Te86ウ】【029.3-Ty992t】  
※『新着書追加目録:技術関係図書』の累積版。

#### d. 林靖一著作一覧

著作一覧を見ると、技術論を雑誌に書いた後、理論を足しこんで単著をまとめていったこと、本局勤務になってからは執筆できなかったことがわかる。

林靖一は若い頃「朴公」の筆名で『局友』(朝鮮総督府鉄道局局友会)に野球に関するエッセイを執筆していたというが、確認できなかった。

- 1 「内地図書館荒し廻りの記」『図書館雑誌』(45) p.24-28 (1921.8)  
【YA5-1366】

- 2 「巡回文庫自動車」『図書館雑誌』(49) p.13-17 (1922.6) 【YA5-1366】  
※Haldane, E. S. 著、林靖一訳
- 3 「朝鮮大洪水のため被害を蒙つた龍山鉄道図書館の惨状」『図書館雑誌』  
(72) p.14 (1925.10) 【YA5-1366】
- 4 『図書の整理と利用法』林靖一著 大阪屋号書店 1925.12 6, 10, 531p.  
【014-H386t2】  
(内容) 図書係から見た図書の種類 図書の選択法 図書購入法 図書保管法 分類、目録、配列法 図書閲覧法 児童図書館 製本 館則及分類表 ※斎藤実(朝鮮総督)、下岡忠治(総督府政務総監)の題字、今沢慈海(日本図書館協会理事)、松村松盛(総督府前秘書課長)、平井三男(総督府学務課長)、安藤又三郎(満鉄京城鉄道局長)の序文あり。『中小都市における公共図書館の運営』(1963)では「合理的な考え方も示されているが、仕事に対する展望がないため、職員の技術書になっている」(p.39)と評された一方、『PRと図書館報』(石井敦編1967)では、「日本の現状からユニークな経営論を展開」(p.28)と、特にPR論について高い評価がなされている。「水害図書整理法」(p.467-476)は災害対策論の嚆矢。
- 5 「図書館雑誌を何とかして欲しい」『図書館雑誌』21 (1) p.29-31  
(1927.1) 【YA5-1366】
- 6 「書物の背にヴァーニシュを塗る法」『図書館雑誌』21 (4) p.131-135  
(1927.4) 【YA5-1366】
- 7 「書物の背にヴァーニシュを塗る法」『図書館雑誌』21 (5) p.163-164  
(1927.5) 【YA5-1366】
- 8 「鹿児島の大会に就て〔全国図書館大会第21回〕」『図書館雑誌』21 (8)  
p.254 (1927.8) 【YA5-1366】
- 9 「書物の背にヴァーニシュを塗る法」『図書館雑誌』21 (9) p.265-266  
(1927.9) 【YA5-1366】
- 10 「公共図書館と学生」『図書館雑誌』21 (11) p.321-322 (1927.11)  
【YA5-1366】
- 11 「協会は雑誌中心化すべし」『図書館雑誌』22 (4) p.89-90 (1928.4)  
【YA5-1366】
- 12 「書物の表紙に館印をから押する法」『図書館雑誌』22 (4) p.79-82  
(1928.4) 【YA5-1366】
- 13 「書物の表紙に館印をから押する法」『図書館雑誌』22 (5) p.111-114  
(1928.5) 【YA5-1366】

- 14 「林図書記号法」『図書館雑誌』22 (10) p.232-237 (1928.10)  
【YA5-1366】
- 15 「木製書架の最上段に額を取つける法」『図書館雑誌』23 (8) p.230  
(1929.8) 【YA5-1366】
- 16 「最近の経験八つ」『図書館雑誌』23 (12) p.310-304 (1929.12)  
【YA5-1366】
- 17 「最近の経験八つ」『図書館雑誌』24 (1) p.122-123 (1930.1)  
【YA5-1366】
- 18 「最近の経験八つ」『図書館雑誌』24 (2) p.5-7, 26-28 (1930.2)  
【YA5-1366】
- 19 「改装製本費ト受入価格ノ諸問題」『園研究』3 (3) p.275-293 (1930.7)  
【YA5-1128】
- 20 「出版常識 (講演)」『図書館雑誌』25 (3) p.107-112 (1931.3)  
【YA5-1366】
- 21 「近頃の経験談」『朝鮮之図書館』(1) p.28-31 (1931.9) 【Z21-457】
- 22 「図書の消毒と掃除について」『図書館雑誌』26 (3) p.54-58 (1932.3)  
【YA5-1366】
- 23 「序」『朝鮮野球史』大島勝太郎著 朝鮮野球史発行所 1932.12 p.1-3  
【FS35-G169】
- 24 「図書販売制度の話」『朝鮮之図書館』3 (2) p.7-20 (1933.5)  
【Z21-457】
- 25 『図書の受入から配列まで』林靖一著 大阪屋号書店 1933.9 12, 354p.  
【014-H386t- (3)】など (内容) 保管上より観たる図書の種類 保管者と保管簿 受入図書の種類 図書出納簿、原簿の受入登記法 事務用カード、書架目録の記入法とその使命 受入図書に為すべき事務 書架配列法と図書記号法 ※初刷1933.9.10、2刷(再版)1933.9.20、3刷(3版)1933.10.1。松本喜一(帝国図書館長)、林癸未夫(早稲田大学図書館長)の序文あり。『朝鮮之図書館』3 (3) p.後13 (1933.9) 【Z21-457】に新刊紹介がある。
- 26 「その後の経験」『朝鮮之図書館』4 (1) p.13-17 (1934.3) 【Z21-457】
- 27 「図書館社会教育に関する諸提案 (続)」『図書館雑誌』28 (6) p.160-164, 159 (1934.6) 【YA5-1366】 ※委員9名のうちの1人として
- 28 「図書館社会教育に関する第二次諸提案」『図書館雑誌』29 (3) p.63-74 (1935.3) 【YA5-1366】 ※委員7名のうちの1人として

- 29 「有用図書を数多く備へよ」『朝鮮之図書館』4 (5) p.3 (1935.3)  
【Z21-457】
- 30 「図書館社会教育に関する第三次諸提案」『図書館雑誌』29 (7) p.183-191 (1935.7) 【YA5-1366】 ※委員7名のうちの1人として
- 31 「今秋大会の開催地朝鮮を御紹介」『図書館雑誌』29 (7) p.196 (1935.7)  
【YA5-1366】
- 32 「改装本の仕様書について」『図書館雑誌』29 (9) p.337-340 (1935.9)  
【YA5-1366】
- 33 『鉄道図書館史原稿』林靖一編 1935 ※『鉄道図書館蔵書目録』(1937)のp.87に「鍼道図書館史原稿」として記載されているもの。散逸したと思われる。
- 34 「本かゝりと抜とち」『朝鮮之図書館』5 (3・4) p.4-15 (1936.6) 【Z21-457】
- 35 「図書の防虫策と空気音湿度調整法 (Air conditioning)」『読書 (朝鮮読書連盟)』1 (2) p.8-13 (1937.3)
- 36 「館務改善資料 (1)」『朝鮮之図書館』6 (1) p.2-7 (1937.7) 【Z21-457】  
※続きは鉄道図書館名義で書かれている。「館務改善資料 (2)」『朝鮮之図書館』6 (3) p.10-21 (1938.2) 【Z21-457】
- 37 『図書保管法 毀損・亡失篇』林靖一著 大阪屋号書店 1937.11 9, 375p.  
【014.6-H386t- (2)】など (内容) 図書の毀損防止法 図書の改装製本 図書の亡失防止策 亡失、毀損図書弁償法 ※松本喜一 (帝国図書館長)、荻山秀雄 (朝鮮総督府図書館長) の序文あり。『朝鮮之図書館』6 (2) p.41 (1937.12) 【Z21-457】 に新刊紹介がある。
- 38 「接架寸感」『図書教育』2 (2) p.36-41 (1950.2)
- 39 「丸善ライブラリー・モデルルームを開設 (図書館ニュース)」『図書館雑誌』44 (4) p.75 (1950.4) 【YA5-1366】
- 40 『図書保管法 毀損亡失篇』林靖一 再版 風間書房 1950.7 12, 392p.  
【014.6-H386t- (2)】など ※1937年刊の復刻に挿図の目次と索引を付す。『図書の解題』弥吉光長著 明治図書出版 1953 【010.8-Z24g】に解題 (p.32) がある。『日本読書新聞』(556) (昭25.8.23) 【Z99-765】に石黒宗吉 (上野図書館閲覧課長) による紹介がある。『出版ニュース』(昭25.8.中旬) 【YA5-111】にも紹介があり、元版は「現在では古書として高値を呼」んでいたとある。
- 41 「経験を語る」『図書教育』2 (7) p.25-28 (1950.7)

- 42 「学校図書館の設備と用品 (1)」『学校図書館』(1) p.21-24 (1950.9)  
【YA5-1134】
- 43 「学校図書館の設備と用品 (2)」『学校図書館』(2) p.13-18 (1950.10)  
【YA5-1134】
- 44 「学校図書館の設備と用品 (3)」『学校図書館』(3) p.17-21 (1950.11)  
【YA5-1134】
- 45 「学校図書館の設備と用品 (4)」『学校図書館』(4) p.16-19 (1951.1)  
【YA5-1134】
- 46 「日本交通協会図書館の改造実績」『びぶろす』2 (2) p.6-7 (1951.2)  
【Z21-114】
- 47 「学校図書館の設備と用品 (5)」『学校図書館』(5) p.12-16 (1951.3)  
【YA5-1134】
- 48 「学校図書館の設備と用品 (6)」『学校図書館』(6) p.16-19 (1951.4)  
【YA5-1134】
- 49 「学校図書館の設備と用品 (7)」『学校図書館』(7) p.18-22 (1951.5)  
【YA5-1134】
- 50 「書架新考」『学校図書館』(15) p.12-20 (1952.1) 【YA5-1134】
- 51 「書架新考」『学校図書館』(16) p.34-40 (1952.2) 【YA5-1134】
- 52 「図書の取扱いと保管」『学校図書館』(54) p.18-20 (1955.7) 【YA5-1134】
- 53 「図書の消耗品扱について (特集・開架図書の消耗品扱いについて)」『図書館雑誌』49 (10) p.366-367 (1955.10) 【YA5-1366】
- 54 「図書取扱規則改正の急務」『東京都公立図書館長協議会会報』(6) p. ? (1956.6)
- 55 「図書の点検法」『東京都公立図書館長協議会会報』(7) p. ? (1956.10)

#### ○参照した主な書誌・総目次

『図書館学関係文献目録集成 明治・大正・昭和前期編』全2巻 天野敬太郎編纂 金沢文圃閣 2000-2001 【UL1-G7】

『図書館学関係文献目録集成 戦後編 (1945-1969)』全4巻 稲村徹元監修 金沢文圃閣 2001-2002 【UL1-G7】

『図書館雑誌総索引：CD-ROM版』日本図書館協会 [1996] 【YH231-H1174】

## 注

- 1) 衛藤利夫によれば（文献a-2）、図書館新設を望んだのは久保要蔵局長であった。
- 2) 「満鉄京城図書館規則」第1条には「本館ハ通俗図書ヲ蒐集シ主トシテ南満洲鉄道株式会社京城鉄道局勤務ノ社員及其家族ノ修養ニ資シ併セテ一般公衆ノ閲覽ニ供スルヲ目的トス」とある（文献c-2）。ただし、昭和10年代後半には専門図書館の性格を強めた。『出版年鑑』【UP3-10】掲載の「全国主要図書館一覧」に鉄道図書館は毎年載っていたのだが、昭和17年版（『書籍年鑑』と改題、1942.8）から記載がなくなっているのはそのためではなかろうか。
- 3) 文献b-1によれば、1928（昭和3）年に廃止とあるが、鉄道局の外郭団体「局友会」への委託経営で存続していた（文献c-9巻末）。
- 4) 安全開架とは、書庫と閲覧室が分離しているが、閲覧者は入庫できるという閲覧方式のこと。入庫時、出庫時に係員によるチェックがある。鉄道図書館では後に自由開架（現代の一般的な閲覧方式）へ閲覧方式を切り替えたことが、文献b-2からわかる。林の開架実践とそれを可能にした論理については文献a-15を参照のこと。
- 5) 文献b-8によると171,078冊。巡回文庫用も含めると225,430冊。戦前は府県立図書館でも数万から10万冊程度の蔵書数であった。

（こばやし まさき 主題情報部人文課）